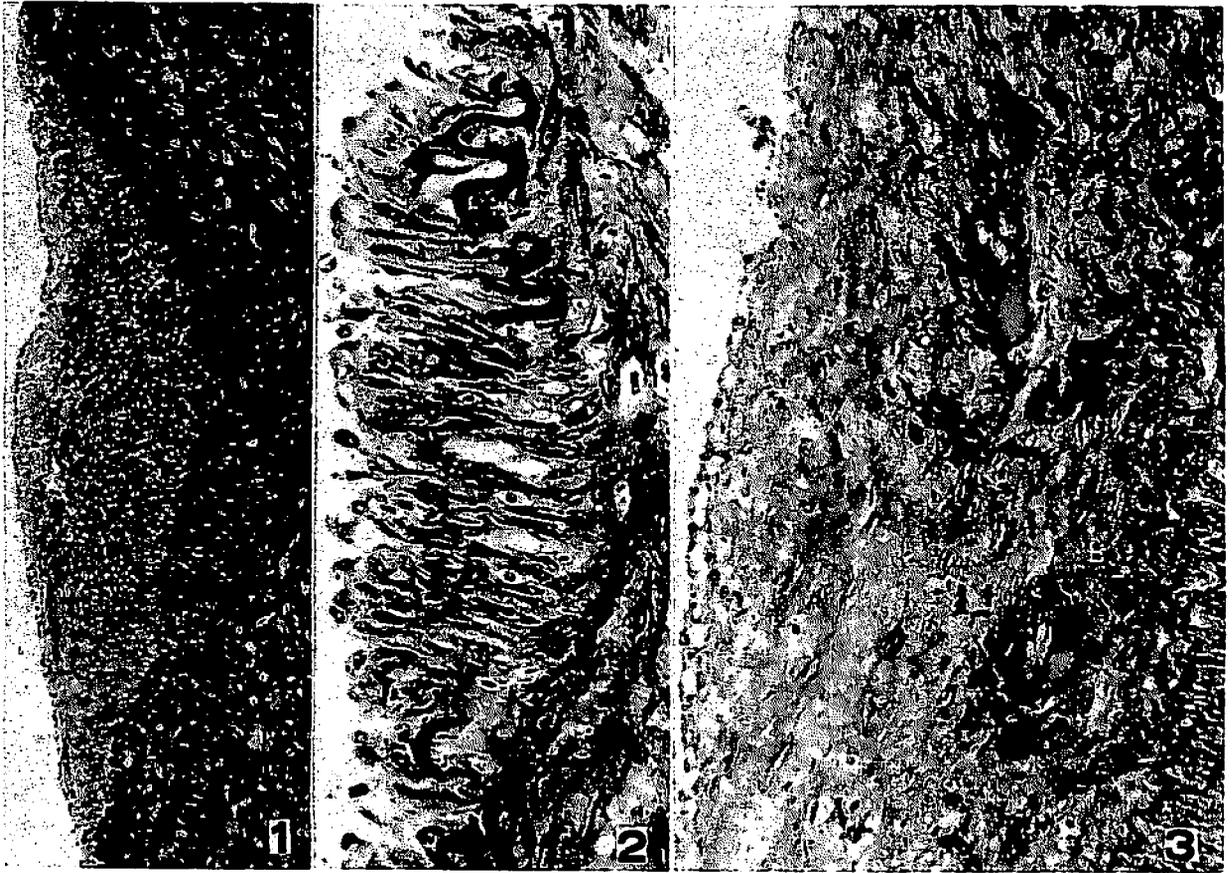


豚の腹大動脈

岐阜大学農学部家畜病理学教室出題 第27回獣医病理学研修会提出標本No.468



動物：豚、品種及び性別不明、約6ヶ月齢。

臨床事項：健康畜として屠畜場へ搬入された肥育豚につき詳細は不明。

剖検所見：大動脈内膜は色淡にして滑沢で著変認められず。その他全身臓器にも提出標本における変化と直接関連のあると思われる所見は観察されない。

組織所見：腹大動脈において丘状の細胞性線維性内膜肥厚が認められる（写真1，PTAH染色，100倍）。この内膜肥厚の主体を成すのは平滑筋細胞の増殖及び線維成分の増生である。その発端病変として、内皮細胞の変性剥離があげられ、障害をうけた内皮細胞直下は疎鬆化し、ここにはPTAH染色で青染する線維素の沈着も見られる。ついで、このような領域の中膜最内層の平滑筋細胞が小型で、その核はクロマチンに富み、細胞質はエオジンに濃染し、不整形になるなど、増殖形へと形態変化し、内弾性板に直角に向ういわゆる立ち上がり現象を示す。そして、これらの平滑筋細胞は内弾性板の窓や断裂部を通過し、内膜へ移動して行き（写真2，PTAH染色，400倍）、内膜は次第に平滑筋細胞が集積し肥厚（写真1）、やがて、

弾性線維や膠原線維も形成される。このような内膜肥厚は、特に、提出標本の腹大動脈後端や、腸骨動脈、腹腔動脈、腸間膜動脈あるいは肋間動脈等の分岐部において高度である。なお、本例と同時に検索された他の7例の若令肥育豚及び6例の繁殖豚においても同様の大動脈内膜肥厚が認められる。さらに、2例の若令肥育豚では、内膜の肥厚部に一致して硝子様物質の沈着も観察される（写真3，PTAH染色，200倍）。この硝子様物質はPAS反応陽性、AZAN染色で赤染、エラスチカ・ワンギーソン染色で黄染し、トルイジン青でメタクロマジー陰性を示し、中性粘液多糖類を含む蛋白質の存在をうかがわせ、さらに、PTAH染色で青染し線維素の沈着を思わせる。以上のように飼育期間の短い肥育豚の大動脈内膜肥厚部に一致して、糖蛋白代謝障害によると思われる硝子様物質の沈着が、本例を含め8例中2例ではあるが認められることは注目される。

提出標本の病理組織学的診断名は肥育豚の腹大動脈における細胞性線維性内膜肥厚とされた。